

ペルシャの薔薇、テヘランの夜 ～イラン現代詩の修辞学に関する研究の現在～

村山木乃実

本講演会は、2020年11月12日、総合文化研究所の主催により、Zoomによるオンラインで開催された。

講演者の中村菜穂氏は、イラン現代詩を専門とする研究者である。主な著書に『現代イラン詩集』(土曜美術社)や、『古鏡の沈黙—立憲革命期のあるムスリム女性の叫び』(未知谷)、『世界の文学、文学の世界』(松籟社)がある。

中村氏はまず、ペルシア詩における典型的なイメージについて、サアディーの『薔薇園』を例に挙げ紹介した。サアディーとは、ペルシア文学最大の詩人の一人であり、彼の代表作『薔薇園』は、韻文と散文からなる教訓的な作品である。

花瓶の薔薇花が汝のため何の役に立とう、
汝は私の薔薇園から花卉を摘め！
その薔薇花は僅か五、六日の生命に過ぎぬ、
されど私の薔薇園は永久に楽しかろう！¹

上の詩のなかの薔薇園とは、色とりどりの花が咲き誇る花園でもあり、サアディーの『薔薇園』そのものでもある。ペルシア詩における薔薇園のイメージは、あたり一面にはてしなく広がる沙漠のなかに現れた緑豊かなそれを想起させる。中村氏によれば、そこには楽園のようなイメージが伴うとも考えられるという。

また、中村氏は、ペルシア文学が我々日本人にとって実は遠い存在ではない点にも触れた。とりわけ、日本で広く読まれているヨーロッパ文学とペルシア文学には深いつながりがある。ドイツの詩人ゲーテの『西東詩集』をはじめ、ヨーロッパ的イメージの中のアラブ・ペルシア的要素は、実は多くの西欧文学作品のなかにみられる。

次に取り上げたテーマは、ペルシア文学における自然についてであった。ここで例として挙げられたオマル・ハイヤームとは、イランの科学者、天文学者、数学者、詩人である。彼の『四行詩集(ルバーイヤート)』は19世紀にイギリスの詩人E. フィッツジェラルドによって英訳され、日本でも愛読されている。

ハイヤームの詩で表現される考え方に、物質的自然としての「存在 (hastī)」と哲学的な「無 (nīstī)」があるという。また、「天輪 (charkh)」とは、天命を司り、人間には定められた運命に抗えないことを示している。中村氏は、刹那的であり今を楽しめという世界観が広が

1 サアディー『薔薇園』蒲生礼一訳, 1964, p.16.



るハイヤームの詩において、①土②花と芝生③酒と恋人が重要な要素になるという。土は、そこから人間が生まれ、死後はそこに還り、そしてそこから新たな生が生まれるとされ、ひたすら無常が広がるハイヤームの世界観を表している。そして、この一瞬一瞬を楽しむとする世界観において、芝生に座り、美女を侍らせながら酒を飲んでいる時こそ心地よい瞬間であるという。

ペルシア文学におけるイメージと喩えとは何だろうか。中村氏によれば、イメージとはペルシア語でいえば詩的形象 (sovar-e khiyāl) といわれるものであるという。つまり、イメージとは、事物やあることに関して思い描かれる姿や形、絵画的イメージを喚起するものとしての語である。その上で、ペルシア詩に多大なる影響を与えたイスラーム修辞学 (balāghat) における比喩構造について中村氏は説明した。イスラーム修辞学における比喩は、tashbīh (≒直喩) と este'āre (≒隠喩) の二つの種類があるという。例えば、「恋人の頬は薔薇のように美しい」という文章があったとしよう。この時、①「恋人の頬」とは例えられるものを指し、②「薔薇」は喩えそのものである。③「のように」は比喩詞であり、④「美しい」は喩えの根拠である。tashbīh とは、①と②が言及されるものであり、este'āre とは②だけが言及されるものであると中村氏は述べる。

このようなペルシア詩の比喩構造を踏まえた上で、中村氏はペルシア詩における典型的なイメージをいくつか紹介した。ペルシア詩において糸杉 (sarv) は、若さや健康、すらりとした長身の姿を表し、月 (māh) は美しく輝く顔、つまり美女を示す。薔薇 (gol) は恋人の美しさ、または美そのものを、水仙 (narges) は酔いしれた、あるいは俯き加減の眼差しを表しているという。このような自然そのものを指していたイメージは、次第にイメージのためのイメージへと変化していく。

イラン現代詩は、古典定型詩に反発する形で誕生した。その特徴として、古典定型韻律から自由韻律への移行、対句の廃止・詩行の長さの自由化、古典詩において使い古された言葉ではなく日常の語の使用という点が挙げられる。イランの現代詩人たちは、これまで課されていた詩における制限を取り払い、新しい詩を生み出すことに挑戦したのである。

中村氏は、ナーデル・ナーデルプール (1929-2000) とソフラーブ・セペフリー (1928-1980) という、イラン現代詩を代表する二人の詩人を挙げながら、現代詩の特徴について説明した。画家詩人とも呼ばれたナーデル・ナーデルプールの『言い得ぬもの』(nā-gofte) という詩では、心のうちにある思いを容易に言い表すことができないという、新しいイメージを切り拓こうと苦心する現代詩人ならではの葛藤が表れている。また、時間をかけて醸造される葡萄酒と詩人の心の苦しみから生まれる詩を重ねて詠った『葡萄の詩』(she'r-e angūr) では、ナーデルプールの詩人としての矜持が表れている。現代詩は、何世紀もの間古典詩が評価されてきたイラン社会に受け容れられるまで時間を要した。『葡萄の詩』には、現代詩を認めない人たちに向けたナーデルプールのメッセージが込められているのだろう。

ナーデルプールはフランス近代詩の創始者といわれるボードレールに影響を受けていた。その影響が濃厚に表れたナーデルプールの『広場』(meydān) という詩は、イメージに整合性があり、破綻がみられないと中村氏は述べる。また、古典詩から使われてきた言葉に加え、「あくび (khamiyāze)」といった新しい言葉を繋ぎ合わせているところに、ナーデルプールの詩作の試みがみられるという。

西欧に大きな影響を受けたナーデルプールとは対照的に、東洋思想へ傾倒したセペリーの『純色』(sāde rang)は、秋の風景を描いている。『純色』は、秋の果実である柘榴の種子が実に透けて見えることに重ねて人の心も見えたら良いのにと詠う、素朴な詩である。柘榴はペルシア古典詩から頻繁に使われているイメージである。日常の風景の描写のなかに、伝統的なイメージと現代的なイメージが織り混ざっていると中村氏は述べる。

講演のまとめとして、中村氏は、ペルシア詩における「喩えること」に関して、ものの属性と関わるような比喩の方が、想像とはるかにかけ離れてしまうようなものより受け容れやすいのではないかと述べた。確かに、古典詩から現代詩の流れをみるに、言葉についてのイメージは変化しているものもある。しかし、中村氏曰く、言葉の捉え方には不変的な面もみられ、そこにイランの独自性があるのではないかという。つまり、言葉のイメージを考えると、「イラン的な」ロジック、すなわちイラン文化固有の詩的論理が働いている可能性があるのだ。

中村氏は、今年提出した博士論文「イラン立憲革命期における詩的言語の研究」の審査においてきわめて高い評価を得た。その博士論文をもとにした今回の講演は、ペルシア文学に興味を持つ聴衆には極めて有益であったと思われる。日本において、イランの現代文学や修辞学について研究者から話を聞く機会は少ない。イラン現代詩を中心に例を挙げながら、難解な修辞学について分かりやすく語られた貴重な講演を通じて、聴衆はペルシア詩が織りなす甘美な世界に酔いしれたのであった。



中村菜穂氏講演会
ペルシヤの薔薇、
テヘランの夜
～イラン現代詩の修辞学をめぐる研究の現在～

中村菜穂 (なかむら・なほ) : 東京外国語大学大学院博士後期課程満期退学、博士(学術)。現在、大東文化大学非常勤講師。イラン現代文学研究・翻訳者。共著書に「イランとイスラム」(春風社)、共訳書に「現代イラン詩集」(土曜美術社出版販売)、ジャーナル「古鏡の沈黙」(未知谷)、「世界の文学、文学の世界」(松籟社)など。

参加方法 登録フォーム
<https://forms.gle-psLegqUuN5XpD1Kf9>
またはQRコードより11/10までにお申し込みください。ZoomのURLを前日にメールアドレスにお送りします。

2020. 11.12 Thu
17:40-19:10
会場 Zoomを利用したオンライン開催

◆主催 総合文化研究所
◆申込先 佐々木あや乃 sasaki.ayano@tufs.ac.jp

